
今日から「お」のつく自営業?

Ponkichi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から「お」のつく自営業？

【Nコード】

N5339Y

【作者名】

Ponkichi

【あらすじ】

高校入学当日、家を出てわずか2歩で不慮の事故によって死んでしまう。そして次に目が覚めたとき目の前に天使がいた。その天使の気まぐれで陰陽師に転生させられてしまう。

処女作なので多少稚拙なところもありますが楽しんで読んで頂けたら幸いです。感想もお待ちしております。

序章（前書き）

処女作なので多少稚拙な部分もありますが楽しんで読んで頂けたら幸いです。よろしくお願いします！

序章

産まれて15回目の春。俺は明日から始まる高校生活をおもいつきり楽しもうと決意し眠りについた……。

「あっさだー！ー！！！」

珍しく朝6時に起きてご飯を食べてシャワーを浴びて、そしていつも以上に丁寧に髪をセットして準備完了！

「いってきまーす！」

家を出てわずか2歩。

それは酷くゆっくりとみえた。

こちらに突っ込んでくる大型トラック、響き渡るブレーキ音。

ドーンッ！！！！

その瞬間俺は宙を舞っていた。そして次に目が覚めたとき俺は雲の上に寝ていた。

「ここはどこだ？ 確か俺はトラックにふっ飛ばされて……ってえー！ て事は俺は死んだのか？ 傷は、血は？ じゃあここは天国？」

それは、パニクる俺にいきなり上から目線の口調をあびせてきた。

「それは少し違うわ小童めっ！」

うわー、なんかいかにも天使ですっていうような面倒くさそうな奴が出て来たー。

こういう奴には関わらないに限る。

目を合わせない様にして逃げた方が良いな。

「なんじゃ、そのあからさまに嫌そうな顔は、ここは不運によって命を落とした者を転生させる場所じゃ。お主はどんなところに転生したいんじゃ？」

まあ気まぐれで選ばれたんじゃがな。

1、魔法使いや騎士となってモンスター

と闘う世界

2、陰陽師になって妖や悪霊たちと闘う世界

3、今まで通りの世界だけど人間以外の生物

になって生きる

さあどれがいい？」

まともな選択肢が・・・無い。なんで今まで通りの世界を人間として生きるって言う選択肢がないんだ。

「そんなのきまっておろう。そんな普通な人生つまらんでわないか！」

心の中読まれたー！ってかその人生を生きるのは俺だ。

「その位どうさもないわ！さあ早く選ぶのじゃ！」

3は、もし魚とか虫とかになったら嫌だし、
1は、なんかありきたり過ぎるし…。

「じゃあ、2でお願いします」

「本当にいいんじゃない？一度決めると変えられぬぞ？」

・・・本当にいいのか俺・・・？

「ああもう、うじうじしておって面倒くさいのお、もう行ってしまえ。さらばじゃ！」

ええー！！！！心の準備が！その瞬間足元の雲が消えて地上へおちていった。

序章（後書き）

このような作品を読んでいただきありがとうございました。これからもよろしくお願いします！感想をお待ちします。

入学式は波乱万丈？

転生してから6年、俺は小学生になった。

今の名前は霧雨^{きりさめ}智樹^{ともき}。

入学式にトラウマがある俺はあまり気乗りはしなかったが、学校へ行った。

無事に学校へも着いたし学校でもこれと言ってなにもなかった……ただ一つ陰陽師に転生したからなのか学校にはこんなにも居るのかと言う位……見える。

そして、今人生最大の危機にひんしている。視るからに悪霊っぽいのが4～5体、鬼の形相で俺を追ってくる。（いつもより多い）まあ、生まれ持った才能なのか、その辺にいるような大抵の悪霊は約半径1m以内には近づけない。……けど、怖いから逃げる！

「ふうー、セーフ何とか逃げ切れた」

やっと家に帰ってこれた。

家の敷地内には入って来られないのだ。流石、陰陽師の家だ。

まあ家が神社だと言うのも関係していいのかもしれない。しかも、家は陰陽師としては日本で3大陰陽師に入るらしい。流派の名前もそれっぽい。

じゃあ、流派の名前の紹介と俺の現状も紹介しよう。

神社の名前は尚禅神社。

流派は龍天流尚禅式陰陽術35代目正統継承者 霧雨智樹だ。

そう正統継承者つまり、次期党首なのだ。

故に闘いからは逃げられない訳だ。

親父が俺に悪霊に対して何も処置をしないのはそう言う理由もあるわけだ。

「智樹帰ってきたのか！」

この人は俺の父親の霧雨龍夫。つまり現党首だ。
別に昼間から家に居るのは無職な訳では無い、神社の神主もしているだけだ。

「うん！」

俺はあくまで小学生らしく返事をした。

「学校はどうだった？楽しかったか？」

「うん！」

あくまで小学生らしくだ！

「そうかそうか、それは良かったな。話しは変わるがな、智樹も小学生になったんだ、そろそろ修行を始めてみないか？」

俺の気持ちは転生する前とは違いこの時を待ち侘びていた。

まあぶっちゃけ、転生してしまったものはどうしようも無いので思いつき切り楽しもうと開き直っただけなのだが。

それに、悪霊どもから逃げっ放しもしゃくだ。

「うん！修行やりたい！」

「いいんだな？相手は悪霊だけじゃないんだぞ、妖も相手にしなければならんだぞ！」

そんなことは分かっているさ。

むしろ、望むところだ！

「うん！それでも修行したい」

「じゃあ、今度の土日から修行開始だ。あと修行は、土日だけだから平日は友達と遊んでて良いゾ」

「ありがとう、お父さん」

フツ、これで俺も陰陽師だぜ！

入学式は波乱万丈？（後書き）

こんな作品を読んいただきありがとうございます。続きも読んでいただけると幸いです！！！！

感想がユーザーのみになっていてすみませんでした。感想をお待ちします！

党首の背中！

早速、修行…と行きたいが今日はまだ火曜日だ。

ああ、早く土曜日来ないかな。

そう言えば、学校で友達が出来たんだ。先にそっちを紹介しておこう。

俺の友達は今のところ順に、佐藤拓馬、水沢夏海、岩崎健、濱岡紀子の4人だ。全員1年生だ。

まず最初に紹介したのは、水沢夏海だ。とりあえず、第一印象は可愛いってことだ。あと、性格は活発で思いやりがある良い子だ。多分、8年後良い意味で化けるな。

次に、佐藤拓馬。こいつは俺らの中でリーダー的存在で、典型的なガキ大将だ。

次は、岩崎健。こいつは頭が小1にしては、なかなか切れるヤツだ。最後は、濱岡紀子だな。こいつは、何と言うか…顔は可愛い方なんだが、少し根暗と言うか…そう物静かなんだ…うん。

因みに俺は、そこそこイケメンで、クラスのムードメーカーといったところだ。

この顔に産まれて来てよかったー！
入学して少しして告白もされました。まあ、ふったけどな！俺は夏海以外の奴は興味無し！

そして今はみんなで学校の近くの公園にきている。

「とーもき君！かくれんぼしよう」

はーい。もちろんやります！貴女がしたい事、俺のしたい事ですから！

「智樹はサッカーしたいよな！」

拓馬「調子に乗ってんじゃねー！俺はかくれんぼがしたいんだー！」

「いや、僕はかくれんぼがいいな」

「まあ、智樹がそう言うならそうするか」

ふっふっふ、見たかこれがムードメーカーの力だぜ！

そして4時過ぎまで遊んで帰った。まあみんな小1だし妥当なところだろう。

「ただいまー！お父さん。今日は友達と公園で遊んで来たんだよ」

とりあえず、親父は心配性なので今日の報告をしとく。

「そうかくそれは良かったな。イジメとかされてないか？大丈夫か？」

「うん！大丈夫だよ。ありがとうお父さん」

「智樹「やっぱりお前は良い子だな」（涙）」

やっぱり親バカは扱いが楽でいいぜ。

「お父さん、僕、お父さんのおんみょうじゅつ見たいな」

「えー、困ったな。どうしようかな」

ふっ、無邪気な俺の可愛いさでイチコロさ
無垢な俺の純粋な眼差しビーム☆

くビーム発射中く

「しょうがないな」特別だぞ

ふっ、楽勝だぜ。

「まず最初に、陰陽術ってのは種類があるんだ。それは大きく分けて、結界術・紙鬼神術・使鬼神術の3つがある。どんな術かと言うと、

〈結界術〉

自分を包めば相手からの攻撃を防御出来るし、相手を包めば結界の中に閉じ込める事が出来る。術者の強さによって結界の強さも変わる。

また、ある程度極めた者は光の屈折を結界によって変えれば姿を見え無くする事も出来る。

〈紙鬼神術〉

紙に呪を書いて使う。霊力をこめるか、霊を憑依させて使う。

霊力をこめる場合は従わせる必要は無いが意思がないので自由に動く様にするのは大変だ。

逆に、憑依させる場合は霊を従わせる必要があるが、低級霊を使えばある程度簡単に出来る。

〈使鬼神術〉

霊や神獣、妖などと契約して使役出来るようになる。

契約の仕方は、まず召喚するか探すかして使役したいモノを見つめる。そして、倒して（滅してはいけない）従わせるか利害の一致により契約出来る。

ただし、倒して従わせているモノは自分の心にブレがあると契約は破られ暴れだす。

つと、まあこんなところだ」

なるほど、どうせなら強い使鬼神がいいな。

親父の使鬼神はどんな奴だろうか？

よし、純粹ビーム発射☆

「お父さんの使鬼神見たいなく。ダメ？」

「わかった。可愛い息子の頼みならお父さん一肌脱いじゃうぞー」

よっしゃー！成功したぜ！

「しっかり、見てるんだぞ。あっ言い忘れてたけど、霊や霊獣、妖、何にしても霊体のときはいいが、具現化させる時は血を捧げなければいけないからな」

親父は他の人にみられないように姿を隠す結界を張り、親指の先を噛んで呪文を詠唱した。

「我に忠誠を誓いし僕契約に従い我に仇なす者を葬れ！^{しもべ}

死をも司りし地獄の番犬 ケルベロス！！！！」

その瞬間、目の前の空間が割れ黒い炎と共に5メートルは有ろうか

と言う黒い犬が現れた。

党首の背中！（後書き）

このような作品を読んでいただきありがとうございました。感想を
お待ちしております！

続きも楽しんで読んでいただけると幸いです。

党首の背中！（2）

「死をも司りし地獄の番犬 ケルベロス！！！！」

その瞬間、目の前の空間が割れ黒い炎と共に5mは有ろうかと言う犬が現れた！

しかも、頭が3つある。カッコいい！！！！

日本3大陰陽師の現党首と言うのは分かってはいたが、これ程までとは。

しかも、ケルベロスなんて伝説級のモノを使鬼神にしているなんていつもの親バカな親父とはまるで別人だった。

ほとんど素人の俺でもこの妖気の凄さがわかる。気を抜いたら吞まれそうな程の妖気と殺気だ。

これでも少しも力を出していないのだろう。

『この小僧がお前の息子か』

ケルベロスは想像どうりの低く重厚な声だった。声だけでも俺の体を硬直させる程だ。

「そうだ。なかなか良いものを持っているだろう？」

『ふむ。何か強大な力を感じるな。ただ、お前とは異質な力だ。』

もしかして俺って才能あり？でも、親父とは異質な力ってのは気になるな。

「強大な力とはどんなものだ」

そう、そこが知りたいんだ。

『今はまだ分からん。そして、この力を扱い切るのはお前でも難しいだろうな』

なんだよそれ。

親父でも扱い切れるか分からないなんて一体どんな力なんだ！

「わかった。ありがとう、もう戻っていいぞ」

『では、また会おう小僧！』

「僕は小僧じゃ無い、霧雨智樹だ」

『ふっ、覚えておこう智樹さらばだ！』

ケルベロスは竜巻を纏い消えた！ただ、おれは竜巻よりもケルベロスに名前を覚えてもらったことの方が嬉しかった。

「どうだ智樹、お父さんの使鬼神はカッコいいだろう？」

この親父からは考えられ無い位かつこよかった！

しかし、言葉とは裏腹に親父は少し疲れていた。使鬼神術は思いのほか疲れるらしい。

「うん！お父さんカッコいい！」

俺はあ・く・ま・で！子どもらしくいった。

「そうだろう？お父さんカッコいいだろう！」

本当にさっきの親父と同一人物か疑う位デレデレになっている…。土曜日よこい早く修行だ！そして、早く超カッコいい使鬼神を手に入れるんだ！

――――――――――

しかし、私にも扱えない程の力とは、一体。智樹にはどれほどの力が眠っているというのだ。

まさか…いや、そんなはずは…。

党首の背中！ (2) (後書き)

このような稚拙な作品を読んで頂きありがとうございます！これからも応援のほどよろしくお願いします。

修行開始？

今日は待ちに待った修行の日。

希望を膨らませていた…だが現実はそんなに甘くはなかった。

「智樹、修行の時間だぞ？」

俺が楽しみにしていたこともあり親父はとても楽しそうに俺を起こしに来了。俺は寝ぼけながら時計をみて驚いた。まだ、朝の4時半だった。

「お父さんまだ、眠いよ」

俺は飛び切り可愛く言った。

だが息子との修行を楽しみにしていた親父には通じなかった。

「何を言っているんだ、修行は朝の澄み切った空気の中でやるから良いんだぞ！さあ早く起きるんだ」

俺は諦めて布団から出た。…まだ眠い。今すぐ寝ろと言われれば何時でも寝れる。

「今日は基本的な霊力操作の修行だ！まずは霊力操作の種類を説明しよう。霊力操作には2種類あるんだ。

まず1つ目は、霊力を高める事。2つ目は、霊力を物理的な力に変換する事。

〈霊力を高める〉

霊力操作の基本中の基本で、どんな術にしても、物理的な力に変換するにしてもこれが出来なければ何も出来ない。やり方は集中する、ただそれだけだ。

〈霊力を物理的な力に変換する〉
これは、いわゆる衝撃波の様なものだ。また、結界術にも通じるものだ。

今日は特に霊力を高めることをやってみよう。」

「えー、使鬼神術はー？」

俺は早く使鬼神術をやりたいんだ！

「まだ、早いからダ〜メ！力も無いのにそんなことをしたら霊力を全部持っていかれて死ぬぞ」

マジで？ヤバイじゃん。なら仕方ない転生して6年でまた死にたくないし基本からやるか…。

「まず、やり方を説明しよう。一番大事なのはイメージだ。体の中から力を膨らませるイメージだ。

そして、ある程度膨らんだら体の外に出して体に纏うイメージだ。」

簡単じゃんそれ位。

「じゃあ、手本を見せるぞ。はあー」

親父が息を吐いた。それとともに親父の周りを取り巻く空気が霊気を帯びていった。

「やってみろ」

俺は親父がやった様子を眺めた。

そして、体の中から力を膨らませるイメージをした。

・・・けど、いっこうに膨らんだ感じがして来ない。再度イメージを固めたがやはり駄目だった。

「お父さん、出来ないよ」

「はっはっは！そんなにすぐには出来ないよ。今月中に出来たとしても早い方だよ」

クッソッ！今日中に何としても出来るようになってやる！

もう1回だ。体の中から膨らませる、体の中から膨らませる…

……ふわっ！

んっ！今なにか体の中で膨らみかけたような気が。よしっ、もう1回だ。

…ドクンッ！

！！！！やっぱり何か膨らみかけているのか？

「まさか…智樹誰かに教わったのか？」

親父のこの反応はやはりできかけているんだ！

「誰にも教わって無いよ」

「お姉ちゃんにもか？」

言い忘れていたが俺には姉がいる。

今年から中学に上がって部活に励んでいるため今日は修行は出来ないらしい。

姉の力はいまより強く、産まれた直後の産声で病院中の悪霊を追いかけてたらしい。

実際喧嘩も男より強い…。

そして、なかなかの美人だ。

「うん、誰にも教えてもらって無いよ」

「そうか、スゴイな。智樹は。お姉ちゃんはここまで出来るようになるまで2週間かかったぞ！

でも、歴代の陰陽師の中で最も強い力を持っていたと言われる初代龍天流陰陽師の昇華院龍天も1日でも、5才で出来たらしい。」

流石初代！でも、そうか、やっぱり俺って才能あるのかも？

再度挑戦…

ドクン！！！！

さっきより大きくなっている！

でも、これを絶えず膨らませながら体の外に纏わなければいけない。

気が付けば俺は夕方まで霊力を高める修行をしていた。

だが、結局出来たのは少し膨らませて保つぐらいだった。

でも、親父から言わせると驚異的なスピードらしいが。次の日も夕方までしていたが、たいして変わりはない。

――――

やはり、あの成長スピードは普通では無い。まずあり得無いスピードだ。

やはり…でもそれ以外考えられない。

そして、数ヶ月が立ち俺は靈力を高める修行はマスターした…と思っていた。だが、ほんの第一段階に過ぎなかった。

「次の修行は、これを瞬時にする修行だ！前はゆっくり息を吐いていたが短く吐くんだ。行くぞッ！はっ！」

親父の周りの空気が靈気を帯びた。

だが、前と違うのは、前はじわじわ変わる感じだったけど、今は一気に変わった。

ようするに、戦うときに隙が出来にくいと言うことだ。

しかし、ただ高めるだけで無く体の周りに纏いどこまで高めるか瞬時に調節しなければならないのだ。

しかし、今は夏休みだ。

一週間が立ち毎日、朝の4時半から夕方までしていたおかげで、何と無くが出来るようになった。

やはり、驚異的なスピードらしい。あとは、夏休みが終わるまでに

仕上げるだけだ。

修行開始？（後書き）

このような作品を読んで下さりありがとうございます！感想もお待ちしています。

次からは多少の年月が流れます。分かりにくい文にならないように気をつけてがんばります。

卒業式は大波乱？（前書き）

更新遅れてすみませんでした。テストが近いのであまり書けません
が、がんばります！

卒業式は大波乱？

「智樹、早く！卒業式で遅刻したら洒落にならないわよ」

そう、今日は小学校の卒業式なのだ。がしかし、あと15分で遅刻だ。

そして、小学校まで走って12分。そうとてつも無くやばいのだ。だけど、俺的には夏海が家まで迎えに来てくれて一緒に登校出来れば遅刻してもいいんだけどな。

そう言えば、最近変な夢をみたんだけど、その夢の中には紫色をした奴と、緑色をした妖のような、神獣のような奴が2匹出て来るんだ。

そして、俺はそいつ等にこう言われるんだ、

『お前は何を願う。お前は何を欲し何を求む』

ってさ、だから俺はこう答えた、

「俺は誰にも負けない強い力が欲しい！」

『何故だ？』

そんなもの理由は1つしかないだろう。

「どんな妖をも倒すためだ！」

『ふっ、お前のその考えが変わった時我らはお前に力をかそう。では、その時まで、さらばだ』

って感じで夢から覚めるんだ。

「おはよー夏海！」

ヤバイセーラー服姿マジ可愛いー！ってそんな事を言っている暇はないんだ。

「おはよーじゃ無いわよ。早く行こっ！」

――――――――――

そんなこんなで滑り込みセーフ。

先生にたっぷりしられました。はい。

ああ、これで小学校生活も終わりかーと思いつつながら特に感動も無く卒業式終ったー！

やっぱり女子は号泣。

なんで女子ってこう言うとき泣くんだろうな。

どうせ皆同じ中学校なのにな。

俺の家は母親しかこなかった。親父は仕事だ。別にいいんだが。仕事が終わるのは卒業式が終わる少し前だ。

ひとしきり、記念撮影とかをやって母親は買い物があるとかで、俺は1人で帰ることに。

家の（神社）石段を上がろうとしたときだった！

ピリッ！！！！

家の方から邪気を感じた。しかも、とてつも無く強大な。とりあえず、紙鬼神で様子を探るか。ん、いつ使える様になったのかって？

まあ、6年間もあったんだ、それ位は出来るさ。

使鬼神術はやり方しか知らないが…。

紙鬼神を媒体にして様子を見た、

！！！！っ親父が妖に襲われている！

ヤバイ今は姉貴も居ない。とりあえず行くしか…無い。

「父さん！大丈夫ッ？」

「来るな！智樹！」

状況を見て愕然とした。親父が押されてる。

「ぐっ！父さんが結界で抑えている間に逃げろ！長くはもたん！」

「だけど！」

親父を置いていくわけにはいかない。

今置いていたら確実に親父は殺られる！

「はっ、早く…早く逃げろ！」

「ぐはぁ！結界が！」

親父の結界が破られて、それは、酷くゆっくりとみえた、妖が親父に襲いかかる。

「やめろー！ー！ー！」

そして、俺は紫と緑の眩い光に包まれた！

卒業式は大波乱？（後書き）

このような作品を読んで下さりありがとうございました！感想もお待ちしています。

具体的に要点を指摘して頂ければ参考にさせていただきますが、悪口や喧嘩腰の感想はご遠慮下さい。

設定詳細（前書き）

久しぶりの投稿ですが、次の金曜日くらいまでは投稿出来無いかもです。

設定詳細

設定の詳細についての説明をします。（作者自身がこのままだときつい…）

告白の件については、改稿したのでそちらを：

紙鬼神術については、紙の大きさはだいたい幅はレシート位で、長さは、用途によって変わりますが、基本的には10～15cm位です。

紙に書いつある呪については、自分の生唾か血を混ぜた墨を使って書かなければいけません。

まあ、智樹は例外なので：ゴホンゴホン、それはさておき、紙鬼神術についてはこれ位です。

次に、使鬼神術についてです。

まず最初に、契約についてです。契約は召喚陣を（契約用）地面か床に描き呼び出す。（召喚陣は家系などで異なる）

また、契約したいモノがいる場所か、封印されている場所まで行き契約する。（ケルベロスなどの人間界以外にいるモノは前者を用いる）

いずれも、戦って勝利して無理矢理契約させるか、利害の一致又は妖等の気まぐれで契約するかです。（無理矢理契約しても契約さえすれば絶対服従する）

召喚の仕方については2つあります。

1つ目は、親父がやったように召喚呪文を詠唱して呼び出す方法。詠唱する呪文は自分で好きな様に決められます。（そのときの気分で変えられる）

けど、必ず何かしらの詠唱は必要で、また、ある程度召喚するモノ

に関係がある言葉ではない。

例…地獄の番犬 などです。

2つ目は、召喚陣を（召喚用）地面か床に描き呼び出す方法です。
この方法は召喚陣を描くぶん時間はかかりますが、多少は難易度が下がります。

けど、契約して呼び出せるだけでも中の上くらいの中級者です。

説明はこれ位です。

何か他に質問があれば、書いて頂ければそのつど…。

最後になりましたが、これからもこんな稚拙な作品ですがよろしく
お願いします！

設定詳細（後書き）

感想をお待ちしています。ダメ出し、アドバイスなども大歓迎です。
よろしくお願いします！

力の意味

俺は紫と緑の眩い光に包まれた…。

「……うっ、ここはどこだ？ 確か俺は…神社の境内にいて親父が妖に襲われてて…」

俺は周りを見渡したが、真っ暗で何も見えない。一筋の光も無い完全な闇。

『智樹：智樹、こっちです』

後ろから声が女の声が聞こえて振り向いてみると、闇の中にぼうつと紫の炎と緑の炎が並んで浮かんでいた。

『智樹』

俺を呼んでいた声の主は緑の炎らしい。

「何故、俺の名前を知っている。ここはどこだ？」

俺は警戒しつつ聞いてみた。しかし、こいつらからは怪しい気配は感じない。

『安心して下さい。ここは、彼方のいた次元とは別の次元です。父上殿もご無事です。』

「本当…なのか？」

俺はこいつ等を信用してもいいのか？

『はい。本当です。でも、あの妖を倒したわけではありません。あくまで、時間の流れる速さが違うだけです』

緑の炎の話しを聞いた結果、ここで数時間話していたとしても、もとの次元では、0.1秒程しかたっていないらしい。

『あまりここに人間が長居をしてはいけません。ここは人間が入り込んではいけない領域、神の領域に近い次元です』

何故、俺がそんなところに？

『では、お前にもう一度問おう』

突然、今まで沈黙を貫いていた紫の炎が沈黙を破った。

…俺はこの声に聞き覚えがある。…夢に出て来た紫の神獣の声だ。

『智樹よ、お前は何を望む。お前は何を欲し何を求む』

今なら俺はこいつの言葉の意味がわかる。

「俺は…俺は、力が欲しい！」

『何故だ？何故、そんなにも力を求める』

「俺は、俺の大切な人たちを守りたい。そのために、力が欲しい」

俺は、もう嫌なんだ。

俺の大切な人たちを俺のせいで失いたくは無いんだ！

俺は忘れていた、力は敵を倒すものじゃ無い、敵から大切な人たちを守るためのものだ！

『…正解だ。力とは大切な者を守るためのものだ。

しかし、それで良いのか、この力を使えば世界を救えるやもしれぬぞ。

お前は助けられるかもしれぬ者を見捨てるのか？』

確かに、こいつ等の力があれば多くの者を助けられるかもしれない、けれども、

「1人の人間が世界を、全ての者を助けるなんてことは不可能だ。

そんなものはただの傲慢だ！

だから、俺は自分のできる限りのことをするだけだ！」

これで力になってもらえずとも別にいい。

俺は俺にできることをするだけだ。

『…ふっ、合格だ。しかし、1つだけ肝に命じておけ。大切な者を守るには自分の命がなくてはならないということをやな』

そうか、人の命を守ると言うのは、自分の命を守ることなのか。

『では、契約を』

俺は靈力を高め、契約の呪文を唱えた。

「我に忠誠を誓いし神獣たちよ、我と契りをかわせ！」

神獣たちが胸に吸い込まれた。そして、闇が吹き飛んだ。

『お前に我等が扱えるかな？』

力の意味（後書き）

このような作品ですが、楽しんで読んで頂けたら幸いです。感想を
お待ちしております。

正統継承者

『お前に我等が扱えるかな?』

親父と妖との距離はおよそ10 m。

親父には、とっさに張った弱い結界が1つだけ。

2~3発の攻撃で破れるくらいの強度。

妖の体長はおよそ3 m。鋭い牙と爪。見た目は赤く、獅子に似ている。

俺と親父の距離は20 m。

(早く我等を呼び出せ! 親父が死ぬぞ!)

ああ、そうだった。

落ち着け: 俺、落ち着け!

契約した今ならこいつ等が何なのかわかる。

「汝、月読に仕えし闇夜の守護神、紫月!

汝、天照大神に仕えし光の守護神、緑陽!

我に守護の力をかせ!」

いきなり紫の炎と緑の炎が胸から飛び出して紫の炎: 紫月が一迅の風の如く駆けていった。

間に合えー!ー!

親父の体を妖の爪が切り裂く瞬間、

風の様き紫月が妖の首元に喰らい付き、そのまま10 mくらい放り投げた。

いきなり横から来た紫月に妖は反応しきれずにあっさり過ぎるくら

い綺麗に放物線を描いて宙を舞った。

『ふっ、お前如きの低級な妖に好き勝手にはやらせねえよ！
しっかし、シャバに出たのは何百年ぶりだ？』

紫月はおよそ5mくらいの紫色の狼だった。

ケルベロスと同じくらいな大きさに

少しケルベロスよりは細い体つきだ。

例えるなら、ケルベロスが土佐犬で紫月が狼って感じだ。

親父をあれだけ押していた妖を前にしても、紫月は余裕の笑みを浮かべ楽しそうだ。

妖と紫月とでは格が違い過ぎる！

そして：カッコいい！

しかし：

『おい！34代目、早くお前の使鬼神も出せ！』

いくら、召喚出来るくらいの力があるとしても、流石に修業を始めて6年目の霊力なんていつまでもつか俺自身分らない。

「ああ、我に仇名す者を葬れ、死をも司りし地獄の番犬
ケルベロス！」

おそらく、親父は使鬼神を召喚する間もなくいきなり襲われたんだろう。

しかし、ケルベロスを召喚してしまえば勝ったも同然だ。

紫月と同じく、格が違い過ぎる！

『やっとお呼びかな？ ずいぶんとやられたものだな龍夫よ』

やはりこちらにも余裕の表情で楽しんでいる。

しかし、いつ見てもケルベロスはカッコいいな。

完全にこちらの形成逆転だ。

「うるさい！ 早くあいつをやれ！」

親父も大分やられていたので霊力などそんなに残っていないらしく、召喚するだけキツそうだ。

『ふっ、あんな雑魚、造作もないわ！

冥土の土産に良い物を見せてやろう。

喰らえ 断頭 ！』

その巨体からは想像出来ないほどの俊敏な動きでその鉋のような爪を使い文字通り頭を切断した。

溢れる鮮血。

あれだけ強大な妖気が一瞬で散った。

『グガアアアオ、何故だ…何故、私が死ななければならぬのだあ
ー！』

体はそのまま動かなくなったが頭は断末魔の叫びをあげた。
暫く生きていそうだった。

…しかし、ケルベロスに踏み潰された。

正統継承者（後書き）

受験勉強があるので、たまにしか更新できませんが、これからもよろしく願います！

強者の覚悟！（前書き）

更新が遅くなりました。

すみません。

週1ペースで更新していけたらと思っています。

強者の覚悟！

頭だけになった妖はゴキブリの如き生命力で生きていた。けど、ケルベロスが踏み潰した。

正直、気持ち悪かった。

生まれて初めて見た大量の鮮血。

妖が死んでやっと思持ちに余裕が出来たのか罪悪感を吐き出す様に吐いた。

しかし、いくら吐こうとも罪悪感は拭い切れなかった…。

「殺す」ということの意味と責任。

敵とかどうとかの問題ではない、「死」というものに向き合う覚悟が俺にはなかった…。

「陰陽師」としての覚悟も…。

別に俺が直接殺したわけではない。けど、紫月に命令したのは俺だ。

『あんま、気にすんな…って言っても無理だろうから言わねえ。けど、アイツを殺ったのお前でも、俺でもねえ。』

ひでえ言い方かもしれねえが、殺ったのはケルベロスだ！』

俺の心を察してか、紫月が言ってきた。

『それに、そんなこと考えている暇があるならてめえの親父の心配でもしてろ！』

そうだ、親父…親父は大丈夫なのか？

「父さん、大丈夫？」

俺は半ば叫ぶ様に親父に駆け寄った。

「あ、ああ…なんとかな智樹こそ大丈夫か？」

「俺は大丈夫…だよ…父さんが無事…よかった…た…」

俺はそのまま意識が途絶えた…。

父さんが俺になにか言っていたが、気にする余裕はもう俺にはなかった…。

—————

俺は差し込む日差しで目を覚ました。

ここは、俺の部屋…か？

「えーと、妖に父さんが襲われてて…俺が使鬼神を出して…えーと、それから…って今日学校じゃね？」

急いで居間に行った。

居間ではいつもの様に親父がテレビを見ながらお茶を飲んでいた。まるで、昨日のことなんて何も無かったの様に、

「お、智樹起きたか？」

の一言。

これが強者の余裕ってやつなのか？

「俺、どれくらい寝てた？」

「そうだなあ、智樹が倒れたのが一昨日だから…1晩とまる1日かな？」

えっ！じゃ昨日のことじゃなくて、一昨日のことになるのか！

やべえ、中学校入学早々に休んだのか俺？

まあ、ほとんど知ってる奴ばっかだから別に浮いちゃうとかの心配はないけど。

俺の通っている北澤第二中学校は俺が通っていた小学校の奴らと周りの小人数の小学校が集まっているので、ほとんど知ってるんだ。

「学校行かないと！今何時？」

「今日はまだ安静にしてなさい！智樹、あなたは霊力が枯渇して倒れたのよ！」

ヤバイ母さんが怒ってる。

この状況で学校に行こうものなら……言い表せない。

「貴方もよ！昨日の夜まで智樹に霊力をほとんど休みなしで分けてたじゃない！」

まだ本調子じゃないんだから無理しないの！」

やっぱり、母は強しってことで誰も母さんには逆らえない。

「はい…」

2人ともそう言うしか…なかった。

「そんなことより、智樹あの使鬼神はなんだ？しかも、2体同時に召喚するなんて。あの2体、両方ともケルベロスと同等に近い強さだったぞ！」

ケルベロスと同等に近い強さだなんて、そりゃそんなの2体も召喚すれば俺の霊力が枯渇してもおかしくはないな。

『そのことについては、私からご説明いたしましょう』

いきなり俺の頭のなかに緑陽の声が響いた。

『智樹様、私の体を仔犬くらいのサイズのイメージで、具現化出来るギリギリの霊力に抑えて召喚して下さい』

あ、ああ。やってみるよ。

「汝、天照大神に仕えし光の守護神、緑陽！
我の前に顕現せよ！」

居間のテーブルに緑色の雷がおち焚き火程度の緑色の炎の中から小さな緑色の鹿が出て来た。

『それでは、私達の全てをご説明いたしましょう』

強者の覚悟！（後書き）

やっと、智樹の母親が出せました。

本当はもっと早い段階で出したかったんですが、なかなか機会がなくて…。

地道に更新して行くので、これからもよろしくお願いします！

運命の出会い（前書き）

久しぶりの更新です。

遅くなってしまいすみませんでした。

これから更新は確実にするので読んで頂けると幸いです！

運命の出会い

『それでは、私達の全てをお話し致しましょう』

…えーと、とりあえず、現状をまとめると

- 1、親父が妖に襲われていて、それを助けるために使鬼神を2体召喚
- 2、その使鬼神が2体ともなかなか強い
- 3、霊力の使い過ぎにより倒れたため1〜2日眠る

まあこんなところか：

「ああ、話してもらおう。君たちが何者で何故智樹の使鬼神になったのかを…」

『少し話しが長くなりますがどうかお聞き下さい。

当時、（江戸時代）紫月は浪花、今で言う大阪を支配しようと勢力を伸ばしていた妖たちの頭でした。そして、私は江戸、今で言う東京を守る守護神たちの長でした。

ですが、紫月たちから浪花を守るために私もかりだされていました』

へー…って敵同士だったの？

『はい』

心の中読まれたー？

『私達是一心同体。考えている事など分かります』

そうなの？俺のプライバシーは？

いやいや、そんなことを考えている暇は無い。

「緑陽、話を続けてくれ」

『大阪と江戸の守護神やその兵士を総動員しましたが、苦戦を強いられました。』

しかし、私は紫月が襲っている妖は全て、人や妖に害をなす妖ばかりだときづいたのですが、殺しは殺し。黙認するわけにはいけませんでした』

大阪と東京の守護神対紫月たちで紫月たちが押すって…紫月どれだけ強いんだ？

『私は浪花の長を説得し、紫月と会談の機会を設けました。』

そして、浪花の守護神たちが今まで以上に取り締まりを厳しくし、監視の目を光らせるつと云うことでなんとかまとまりました。しかし、そんなさなか……』

緑陽の目はとても遠くを、遙か昔の記憶を見ている様に見えた…

――――

『緑陽様！申し上げます！』

緑陽のもとに部下であろう妖が焦った様子で走ってきた。

『落ち着きなさい。何があったのですか？』

緑陽は冷静に報告を聞いた。

『只今、人の町に巨大な妖が現れました！』

結界専門の者たちを総動員していますが、いつ暴れ出すかといったところですよ！』

『そうですか：分かりました。では、私が直接見に行きましょう。』

緑陽は顔色一つ変えずに、そんなことは何処吹く風といった調子で言った。

もちろん、緑陽もことの重大さや、妖が最低限どれ程の力を持っているのか理解できた。。

だが、自分を取り乱しては周りをもっと取り乱してしまう。

緑陽はそれを見越していた。

『お、お待ち下さい！危険です！しばらく様子見を！』

『だから私が直接様子を見に行くのです。下の者たちを犠牲にして報告を持っているなどもってのほかですよ！』

『ですが！』

『なんとわれようと私はいきます！』

『しかし、……いや、緑陽様は昔から一度決めたことは絶対に曲げない頑固者ですからね。では、私もお供致します！』

緑陽は頑固オヤジも真っ青なとてつもない頑固者だった…。

『ありがとうございます。では、前に協力したあの浪花の長にも協力要請を出して下さい！嫌だと言ったら恩を仇で返すのですか？と言いなさい！』

流石、多くの者を束ねる長だけはある。優しさだけでは務まらない。

『もう既に出してあります！嫌なんて言わせません！』

『彼方はつくづく優秀ですね。彼方の様な部下を持てたことを私は光栄に思いますよ』

緑陽の部下もやはり優秀だった。

『恐悦至極にございます。では、向かいましょう！』

~~~~~

現場に着くと、緑陽が思っていた以上にことは重大だった。しかし、緑陽は余裕の表情で

『皆さん、大丈夫ですか？辛いと思いますがもう一踏ん張りです。頑張らしましょう！』

『はい！オイッ、お前等！我等の勇姿今見せんでいつ見せるのだ！』

緑陽の一声で部下の士気は倍増した！

妖の正体は白龍だった。白龍は龍族の中でも、稀少で体長も他とは比べ物になら無いくらいデカイ。

形は日本風な細い龍と西洋風な太くてゴツいドラゴンの間みたいな感じで少し太くて長い形だ。長さは15mくらいで、四つ足で高さは6mくらいある。

簡単に比較するならば、紫月や緑陽の3倍くらいの大きさだ！  
全ての妖の中でも単体の強さならば、確実に最強クラスだろう。

（これ以上、町に被害をだしてはいけ無い。しかし、これ程の妖をどうしたものか…）

『緑陽様！浪花から結界専門の者たちと兵士が到着しました！』

流石に立場上、長は来なかったが、中々の強者が揃った。

『結界専門の者は結界の方にまわして下さい！それ以外の者は私に続きなさい。しかし、無理は禁物です。』

では、行きましょう。皆さん、ご武運を！』

『ちょっと待った！！！』

緑陽が妖に向かって走り出した瞬間、誰かが叫んだ！

『こんなに楽しそうな祭り久しぶりだぜ！俺も混ぜな！』

紫月が部下の中でも精鋭ばかりを従えてやって来たのだった。

『な、何？部外者は引っ込んでいなさい。あなたの实力は認めます  
がこればかりは許しません』

『へっ、知るかよそんな事！いくぞ、野郎ども！俺たち夜鬼衆の力  
思いしらせてやろうぜ！』

『『はい!』』

紫月たちは緑陽の制止も聞かずに突っ込んでいった。

紫月たち夜鬼衆は総勢30ほど、対するは結界に縛られ動けない白龍一匹。

紫月たちが全ての妖力を込め渾身の1撃を放つ。

途轍もない光を発して、砂塵がまった。

『ヤッタぞー!』

その場にいた全ての者が勝利を確信していた。…いや、ある2匹を除いては…。

『『まだだ（まだです）! 離れろ（離れなさい）ーーー!』』

紫月と緑陽が同時に叫んだ瞬間、結界が破れ、砂塵が突風に吹き飛ばされたかと思うと、中から巨大な尻尾が振り下ろされた。

紫月は逃れたが、殆どの夜鬼衆が薙ぎ払われた。そして、そのうちの半数近くはその圧倒的な破壊力になす術も無く吹き飛んだ。そこに残ったのはただの肉片。

紫月たちの攻撃が文字通り逆鱗に触れ暴れたのだった。

白龍にしてみれば、結界など薄い氷のような物で、破るのなど容易なことだった。

『殺りやがったな? テメエだけは… テメエだけは… この命に換えても

絶対に許さねえ!』

仲間を殺られ怒りの限界を振り切った紫月の妖力が爆発的に増幅した。

『落ちつきなさい! 彼方が闇雲に突っ込んだところで、彼らのにのまえます。』

『うるせえー! あいつはあいつだけは…この手で…』

『分かっています。なにも退けなどとは言いません。私と彼方の力を合わせるのです。』

皆の者聞きなさい私と紫月だけで行きます。夜鬼衆とあなた達は遠くから援護を頼みます!』

この状況で多勢で突っ込んだでは、緑陽の言う通り、にのまえた。

それに、紫月や緑陽程の力が無い限り数など関係なく一瞬で殺られる。

『二手に別れて攻撃しましょう。行きますっ!』

正面から突っ込み白龍の腕が振り下ろされる。その瞬間、左右に別れる。

攻撃をくらうとどうなるかは腕を振り下ろすだけでえぐれる地面と腕に纏う爆風が物語っていた。

間違いなく…死。

お互いの役目は囃役と隙を突く役。どちらも相手を気づかい、隙あらば突く。

何度も牙と爪を交えた仲故に出来ることだ。

闘いが始まり1時間。既に、体力も妖力も底を尽きかけていた。残酷なことに死は1歩ずつ確実に近づいてきていた。

だが、対象的に白龍はほぼ無傷である。

そして、ついにそのときが来た。

緑陽の体力はとうとう底を尽き意識は朦朧とし、殆ど目は開いていなかった…。

緑陽が気が付いたときには既に大剣の如き大爪は眼前に迫っていた。

『緑陽――！！！！』

叫ぶと同時に緑陽と白龍の間に滑り込んだ。

『ぐはあ！』

紫月は咄嗟に殆どない妖力をかき集め体を守ろうとしたが、深い傷を負い吹き飛んだ。飛び散らなかったただくまだましだった。

『紫月っ！私のために…』

『気にすんな…ゴホッ…守れなくて悪かったな。俺…お前のこと…』

紫月はあっさり過ぎるほどあっけなく死んだ。

『私もです…紫月』

そして、今度こそ振り向いたときには遅かった。

『ぐはぁ!』

……は……た……しは……私は死んだのだろうか……。でも、紫月と共に死ぬのならも……。

「あんた等は今、魂だけや。けど、死なせへん。まだ、死なせへんよ。僕には君等が必要なんや」

『どういふ……ことですか……?』

「君等にもう一度、命をやる。けど、1つだけ条件がある。それは、僕の使鬼神になってほしいんや。それでもいいなら君等に命をやる。」

この人は一体……。

「僕は昇華院龍天。陰陽師や。それでもそこそこ強いんやでえ? それに、白龍から仲間を守りたいんやろ?」

陰陽師昇華院龍天……この男を信じてても良いのだろうか? しかし、この男を信じるしか道は無い。

『分かった。条件をのもう』

「じゃあ契約を…我に忠誠を誓いし神獣たちよ、我と契りをかわせ！  
じゃあ、ぞんぶんに闘っておいで」

魂が体に戻った。そして目が覚めると

『あれ？私は生き返ったのですか？傷が無い？』

『俺もだ。まあ何にせよたすかった』

「ほら君たち！早く白龍倒さんと被害大なるでえ？」

（あれ？紫月は契約のことをしらないのか？）

『はい！』

何だこの力は？妖力も白龍には少し劣るが格段とあがっている。

今ならやれる。私たちなら…。

『紫月！やりましょう！』

『おう！くらえ…闇夜に輝く紫の月…紫閃月華…凶月神舞！』

『きめます！全てを照らす太陽の光…生命の根源…新緑陽華…照緑  
神舞！』

紫と緑の閃光が白龍を貫いた。



## 運命の出会い（後書き）

今更ですが、「・・・・・・・・」で囲んだ言葉が人で、  
『・・・・・・・・』はそれ以外です。

## 新たな敵は陰陽師？（前書き）

前の話、改稿したので読み始めが前の話と合わないと思った方は前の話を先に読まれたほうが良いと思います。

## 新たな敵は陰陽師？

紫と緑の閃光が白龍を貫いた。

――――

『つというのか私たちの出会いですね。』

「へえーなるほど…っじゃなくて、昇華院龍天って初代の名前じゃん！」

『はい。そうですけど？』

え、何で初代と俺の使鬼神が同じなんだ？

『それは、彼方が…』

緑陽は黙り、親父が口を開いた。

「先祖返りだから…かな？」

『はい…』

先祖返り…？何だそれ？

何か緑陽たちに声を出して話す必要はない気がしてきた。

でも、声に出さなかったら他の人が会話に着いていけなくなるな。

「先祖返りって何のことだ？それに何で龍天の使鬼神になっただけで1発で白龍を倒せたんだ？」

白龍は単体では最強クラス。

しかも、紫月と緑陽が協力しても全く歯がたたなかった。それがなぜ、いきなり？

『白龍を倒せたのは使鬼神になるという契約に縛られるのを代償に力を得たためです。』

その力は使鬼神を使役する者の力量に比例して上がります。今の智樹様では、龍天様ほどの力を私たちに与えられません』

なるほどな。ようするに、まだまだだってことか。今の俺じゃ仲間を守れない…。

『そう悲観しないで下さい。彼方はいずれ龍天様を超える。先祖返りとはそういう物です』

だから、先祖返りって何なんだよ！

『あ、そうでしたね。先祖返りとは…その名の通り先祖の中でも特に強い者の魂がいや…正確には魂の資質がその子孫に引き継がれることです』

じゃ、俺の魂は龍天の物なのか？じゃあ、転生前のアレも領けるかもしれない。

「俺の魂は、龍天の物なのか？俺は龍天なのか？」

『どちらも違います。彼方の魂は彼方の物です。そして、彼方は彼方です。他の誰でもなく霧雨智樹です』

じゃあ、一体：

『資質とは言わば才能や能力の属性のことです。彼方と龍天はそれぞれ違う器に入っているけど、中身は同じ物だと思って下さい』

いまいちよくわからないな？とりあえず、俺が龍天のではなく、俺の力が龍天の力と同じってことか。

ていうか魂何て誰に転生するかわかんないし、たまたま子孫だったってことじゃないのか？

他の奴に転生してもこいつ等を使鬼神として使役出来るんじゃないのか？

先祖返りの意味は無いんじゃないか？

『そんな事はありません。私たちは彼方以外の者に転生した場合、使役されることはありません。と言うか、血族と先祖返りが重要なので、その条件が揃わない限り使役は出来ません。まあ、特別な力的なものを使えると思いますが：』

なるほどなあ…。

なんとなくこいつ等のことが分かって来た。

そして、俺自身のことも…。龍天のことも…。少しずつ、少しずつだけ…。

つと物思いにふけっていると、親父が：

「大体の事情は分かった。だが、分からないことが一つある。何故、あの様な中級の妖が結界の中に入って来れたのか…。小物ならまだしも…この町全体には妖を探知する結界を張ってあった。

それにこの寺にも妖が入れない様に結界が張ってあったはずだが？」

と言った。

えっ、そんな結界が張ってあったのか？

町全体？そんな事、可能なのか？

だとしたらどうやって入って来たんだ？

『それは…、おそらく結界の中から妖が何者かによって召喚されたのでしょう』

「そうか…人ならば結界の中に入ることは可能か。と言うことは相手は陰陽師なのか？」

『いや、そうとは限らねえぜ！』

いきなり出てくんな！

「どういうこと？ってか、どうやって紫月は出て来たの？召喚した覚えはないよ？」

『そんなもん、根性だ！…なんてな、先祖返りってのは色々特別なんだよ！それより、智樹、龍夫が襲われてた時なにか感じなかったか？』

そんな事を気にしてる余裕なんかなかったからなく。  
いまいち覚えてないな…。

「どういうこと？何も感じなかったけど…」

『まあ、仕方ねえわなあ。上手く気配を消してたが木の影に誰か隠れてたぜ。そうだろ？緑陽？』

『はい。ですが、私はもしもに備えて智樹様のお側にいたため動けなかったのも、何者かは確認出来ませんでした…。

結界を張ることも出来たのですが智樹様の霊力が一気に尽きてしま  
う危険もあったので…』

えっ、マジで？全然知らなかった！

…やっぱり今の俺じゃ…。

俺の力量なんてまだまだだ…初めての闘いで余裕もないからってそ  
んな事にも気付けないなんて…。何が先祖返りだ！自分の才能に溺  
れて…いざという時になんにも出来ないじゃないか。

「それより、何故陰陽師じゃないと言える？」

親父は冷静に続きを促す。

『そいつからさほど霊力は感じなかった。もちろん妖力も。つーこ  
とは、考えられることは1つ、自分の命を力に変えているってこと  
だ。

陰陽師ならそんなリスクを犯してまで非効率な事はしねえ。てか、

命を力に変えること自体が少ない霊力で召喚するよりも自殺行為だ』

そうか、普通は修行を初めて6年程度じゃ霊力が少な過ぎて使鬼神術は習得どころか、その修行さえ出来ないんだ。

もちろん、召喚なんてもってのほかだ。

条件的には俺は死んでもおかしくはなかったんだ…。

「そうか！その方法があったか…。いや、むしろそうだとしたらなおさら陰陽師の可能性が高いな…」

『あ？どういう事だ？』

珍しく紫月が驚いた口調で言った。

「前に智樹には言わなかったか？日本には3大陰陽師と言われる陰陽師たちがいたと。

龍天もその1人だが、その3人がそれぞれ築いた流派を3大流派という。

そして、どの流派もそれぞれ独特な闘い方をする。

そのうちの1つに自分の命を力に変えて使鬼神を召喚する禁術があったらしい」

『な、なんだと？そんなもん聞いたことねえぜ？』

俺も聞いたことが無い…。

まあ、紫月が知らないのに俺が知っているはずも無いのだが…。

というより、自分の命を削ってまで召喚するなんてバカげてる。故に禁術となったのか…。



『その流派とはもしまゝ：蛾存流のことでしょうか？』

「左様。蛾存流とは文字通り3大陰陽師の1人、蛾存により開祖された流派であり、その特徴は霊力が少なくても扱える陰陽術を得意とする。」

そのかわり、攻撃力の低さや強力な使鬼神を使う事が出来ない」

さすが親父！3大流派に数えられる流派の現党首だけのことはある。いざという時だ・け・は！頼りになるな。

『なるほど、これなら辻褄が合いますね。あなた程の陰陽師を殺すのにあの様な中級の妖をわざわざ使うとは考え難い：つまり、上級の妖を召喚出来ないと考える方が話しが合います』

という事は、陰陽師が黒幕という可能性が最も高いな。けど、何故だ？何故、陰陽師が陰陽師を襲う必要がある？

「そうだな、そうだとしたら、早急に手を打たねばな。よし、分かった。この件はこちらで調べよう。何か分かり次第また話し合おう」

簡単に「こちらで調べよう」とか言えるのが凄いな…。

一体、どんなツテがあるんだ？

その後、とりあえず解散になったので俺はせっかくの休みなのでもう1眠りする事にした…。

## 新たな敵は陰陽師？（後書き）

受験勉強もいよいよ本気でやらないといけないのであまり更新は出来ませんが、これからよろしくお願いします！

10話目で紫月が「お前如きの低級」と言ってますが、これは雑魚と言う意味で本当は中級です。

質問や意見も大歓迎です！

特に、悪い点などが有りましたらハートブレイクしない程度で言ってくださると嬉しいです！

## 幕開け

結局、あの話し合いから特に進展の無いまま1週間が経過していた。

智樹は、1人で部屋に居た。

こういう時は割とシリアスな気分になるはずなのだが…。

（智樹！まだ喧嘩出来ねえのか！もう待ち切れねえぜ！）

紫月が大体騒ぐ…。

ガキかお前は！

（まだだよ。誰が黒幕か分かってないじゃん）

（そんなもん蛾存流の奴等を片っ端から潰してけばいいじゃねえか  
！）

実年齢5〜600才くらいのはずなのに…何処までガキなんだよ！  
片っ端から潰したりしたら唯の辻斬りだよ…。それに俺の霊力も  
たないよ。

（んだとコラッ？お前はいつ俺をガキ呼ばわり出来る程偉くなった  
んだ？1回目は我慢するが流石に2回目はキレるぜ？お前の霊力な  
んかしるか！根性でなんとかしろ！）

聞こえてた！そうだったこいつ等俺の心を読めるんだった…。好い  
加減学べよ俺！

でも、俺はこいつ等の心読め無いじゃん！なんか不平等じゃね？

（当然だろ！なんで俺とお前が平等である必要があるんだ？）

（んだと！そもそも、契約する時は礼儀正しかっただろ！緑陽はむしろ様付けになったから良いけど、なんでお前は酷くなってんだよ！）

（相棒に気兼ねする必要なんかあるか？）

何かカッコよく聞こえる？

（紫月！主には礼儀正しくするのが当然です！）

なるほどね…緑陽と紫月は根本的に考え方が違う訳か…。

まあいいや、なんか疲れた…。

もう寝よう。

翌朝、目が覚めると…7時50分。

ヤバイ！なんで？目覚まし時計セットしてから寝たはずなのに…。

（ねえ？紫月君、君何かしなかった？何か爪で切り裂いた様な跡があるんだけど？）

（し、知らねえなあ…？）

「てめえ！やりやがったな！コラ？オイ！昨日の腹いせか、ああん？表出ろ！」

『うるせえなあ！おめえが先に喧嘩売って来たんだろ？』

「だから、勝手に出てくんじゃねえ！俺の霊力が減るんだよ！」

『そんなもん知るか！おめえが雑魚だからだろうが！ああん？』

そんなこんなで騒いでいると…

「うるさい！智樹何やってるの！早く朝ごはん食べなさい！紫月ちゃんも朝からうるさい！」

母親が鬼の形相で言ったので有無を言わず強制終了。

「『はい。ゴメンなさい！』」

「い、いや、でも僕もう時間が…」

「ん？智樹、何かいった？朝ごはん食べるわよね！」

はい！喜んで食べさせて頂きます！

全ての準備が終わったのが8時10分：遅刻まであと5分＝間に合わない…。

（智樹様、私を召喚して下さい！）

何か分からないが…

「汝、天照大神に仕えし光の守護神、緑陽！我に守護の力をかせ！」

目の前に緑色の炎が上がり中から緑陽が出て来た。

『私の背中に乗りなさい』

「誰かに見られたらどうするの？」

『心配は要りません。結界を張って見えなくします』

と言うか言わ無いかで智樹を口でつまみ背中に乗せた。

『では、確り捕まっていて下さいよ！行きます！』

「うわああああ！」

ものすごいスピードで町を駆け抜ける。

例えるなら常に新幹線並のスピードで走るジェットコースターに乗って居る様なものだ。しかも、安全装置無し！

学校には無事遅刻する事なく着いたが、着いた時には智樹はすでに失神寸前だった。

また、失禁寸前でもあった。

そして、理科室へ移動中のことである。

「ん？」

ふと背後から何かがこちらを見ている気がした。

そして、放課後…。

「智樹、一緒に帰ろ！」

夏海と帰れるならばどんな予定でも蹴り飛ばすぜ！

夏海とは同じクラスだった。

そして、暫く歩いていると学校で感じたあの気配がした。

しかも、学校で感じたときよりも禍々しくなっていた。

しかも、次第に距離を詰めて来る。これでは夏海を家に送り届ける前に追い付かれる。

「夏海、ゴメン！学校に忘れ物したから先に帰ってて。また、今度一緒に帰ろうぜ！ゴメンな！」

夏海と別れ学校に向かって走る。しかし、真意は夏海と距離を取る事にあった。

やはり気配は俺の方についてくる。

目指すは近くの資材置き場…。そこで迎え撃つ。

資材置き場に駆け込む。

相手はおそらくプロの陰陽師。そして、おそらく蛾存流。

俺が使えるのは霊力操作、紙鬼神術、使鬼神術のみ。

結界を張れないのは致命的だ。

使鬼神を召喚すれば話しは別だが、霊力量から考えて1体召喚する  
とを考えても10分程度しか保たないだろう。

使鬼神術だけに霊力を使った場合の計算だが…。

相手は結界で姿を見えない様になっている…気配の数は3つ。

そして一気に結界を解き使鬼神を召喚した。全て中級だが中の上と  
いったところだ。前に襲ってきた奴くらいの奴が3体いると考えれ  
ば分かりやすいだろう。

「余裕を残して3分だ。やれるか？」

『愚問だな』『十分です』

相手は、全長8m程のおおむかで大百足、手が鎌状になっている和服姿の女、  
全長3m程のもろファンタジーに出て来るようなトロール。

使鬼神の種類は多種多様、妖だけに限らない。

様々な次元から召喚し契約できる。

「じゃあ、行け！」

『おう！』『はい！』

2対3。単純に考えると1体は俺に来る。

紫月はまずトロールに襲いかかる。



一瞬睨み合い僅かに紫月が先に動いた：トロールも遅れて反応する。

（遅い！鋭月）

だがすでにトロールの体は上半身と下半身に分かれていた。

トロールが煙と化し主の中に戻る。

これで、2対2。

一方、緑陽は手が鎌状になっている和服姿の女を相手にしていた。

（長いので略して鎌女とする）

使鬼神どうしや妖どうしの戦いは肉弾戦も必要だが妖力や霊力のぶつけ合いも1つの闘い方だ。

やはりこちらも睨み合い、お互いの出方を見極める。

数十秒の睨み合いが続きほぼ同時に動いた。鎌女は全速力で突っ込み、緑陽は緑色の閃光を出す。

『緑閃』

鎌女が咄嗟に防ぎ、軌道をずらした。お互い距離を取り鎌女は妖力を緑陽は霊力を閃光として放つ。

お互いの力は暫く拮抗したが緑陽が押し勝った。そのまま鎌女は後ろに吹き飛ばされたが緑陽は止めを刺すべく突っ込む。鎌女の体調は人間と同じくらい。体格の差は歴然である。吹き飛ばされながらも鎌女は鎌を振るうが体に霊力を纏わせた（霊力武装、略して霊装）緑陽には傷一つ付けられない。

『足掌打』

緑陽は容赦なく全力で鎌女を踏み潰した。

やはり煙と化し主の中に戻った。

残りは大百足のみ。先に紫月が相手にしていたが強力な妖力武装（

略して妖装）をしていたため致命傷は与えられてはいなかった。おそらく3体の中では1番強い。

『智樹！もっと靈力を上げろ！』

『智樹様、落ち着いて集中して下さい！』

集中…体の中の力を練り上げるイメージ。基本だ！習った通りやれば大丈夫だ！平常心を保て！俺！

「はぁっ！」

体の中から靈力が溢れだす。

『その調子だぜ！』『流星です！』

今は何も考えず、ただ靈力を高いままに保つことに専念する。

紫月や緑陽を信賴しているからこそ出来ることだ。

『智樹の靈力を考えると次で最後だ！』

『はい！本気でいきます！』

紫月と緑陽は出来る限りの妖装と霊装をして突っ込む。

『鋭月』『足掌打』

紫月が体を八つ裂きにし、緑陽が頭を踏み潰した。  
大百足も煙と化し主の中に戻った。

何とか智樹の霊力が底を尽きる前に倒せた。

『やりましたね、智樹様！』

「ああ、何とかね…。緑陽、紫月、ありがとう。助かったよ」

陰陽師たちは何時の間にか消えていた。

「仕方が無い。家に…帰ろう…」

重い足を引きずり何とか家まで帰り、その日は親父に報告し無事に何事もなく終わった。

親父は予想以上に心配してたが…。

## 幕開け（後書き）

技名が物凄く安直なのがなやみです。

まあ文の稚拙さも悩みなんですけど。

何か参考になるものや、自分で考えた技名などがありましたら感想に書いて頂けると助かります！

## 旅立ちの決意！（前書き）

最近割と早い頻度で更新してます！

まあ冬休みが終われば元に戻りますが……。

後書き長いですが、読んで頂けると……。

今回はシリアスな感じになっているので短かめにしました。

いつも短かめですが……。

## 旅立ちの決意！

翌日、今日は学校が休みだ。

昨日は疲れていたので報告だけだったが、今日は更に詳細を説明して、これからについて話し合わなければならぬ。

・・・

一通り説明し終えて親父の反応を待つ。

「智樹、それはおそらく蛾存流だ。それは分かっていた事だからいい。それより召喚には2種類あるんだ」

親父は唐突に言った。

「まず、お前が使っている方法は契約してから、召喚するだろう？けどなもう1つあるんだ。それは、ただ召喚して解き放つだけ。これは、自分には従わない」

「え、危ないじゃんそんな方法」

自分に従わないのなら召喚してどうするんだ？自分も敵とみなされれば殺られるかもしれない。

「ああ、だから召喚したら私たちを囷にして自分は逃げる。そして、召喚された者たちは目の前の私たちを敵とみなし襲う」

「でも、それって契約してないなら倒したら死ぬよね？」

使鬼神などの場合は倒されても煙となって主の中に戻る。昨日の様に……。しかし、1度倒されて戻ったら暫くは召喚出来ない。

「ああ、だから私を襲った妖は死んだんだ。けどな陰陽師にとって使鬼神以外の妖は敵でしかない。使鬼神すらただの道具と考えるくらの奴らだ、そんな敵が死のうが知った事ではないと考える輩もいる。されに契約する手間も省けるから効率がいい」

親父の目は異様に冷たく見えた。ガラスの様に生気の無い目で淡々と話す親父に俺は一瞬、恐怖すら感じた。

親父自身そんな奴らを散々目にして来たのだろう。利用するだけ利用して殺されようがお構い無しの腐った奴らを……。

「そんなの…間違ってる!!!」

「智樹、世の中には理不尽な事もあるんだ！お前はもうこの件には…関わるな……。お前が要ると足でまといになる。お前はげんにすでに襲われているんだ」

「…でも！」

「でもじゃない！すでに手配はしてある。前から考えていたんだ。この件は龍天流の問題だ」

「俺も…俺も龍天流の陰陽師だ！」

「では智樹、お前に何が出来る？結界も張れないお前に。直ぐに感情的になるお前に。私はこれ以上お前を危険に晒したくないんだ…分かってくれ、智樹……」

「父さん……」

親父、分かったよ。親父が俺の事をそんなに、そんなに思っていてくれたなんて…。

「分かったよ。けど、手配ってどういう事？」

「私の古くからの友人でな、龍天流の陰陽師の専門学校をしている者がいるんだ。そこにお前を預ける」

専門学校……。預けるって事は家には当分帰れないのか？

「え、それって夏海やほかの奴らとは会えなくなるってこと？」

「そうだ、だがそこならばここより安全だ。そこで本格的に陰陽術を学んでこい」

会えなくなるのは……嫌だ！

けど…今の俺じゃ確かに足でまといだ……。それに今のままじゃ仲間を危険から守る事も出来ない。

もう、大切な仲間を失う苦しみを味わいたくはないんだ！  
あんな……あんな思いなんか2度と……。

俺の気持ちは決まった。もう、絶対に揺らぐことのないだろう決意が。

「腹を括るしかないんだね……。分かったよ。俺、そこに行くよ」



「すまんな…」

「けど、友達にさよならを言う時間が欲しい……」

「ああ今日は土曜だから月曜日に学校で挨拶して来るといい……水曜日から登校だ」

「分かった。ありがとう」

いきなりの展開で頭の整理がイマイチつかないが、わざわざ親父が預けるくらいだからここにしていると俺が前より危険なめに会うのだろう。

俺が俺では対処出来ない程の更なる危険なめに会う。それはつまり、周りの奴等が家族が仲間が、そして……大切な友達が危険なことに巻き込まれることを意味する。だが、裏を返せば専門学校がそれ程安全だということだ。また、仲間の安全も保証されることもある。

何も知らない奴等が巻き込まれるのは、それだけは絶対に避けたい。

その先に待つのは絶望と死。

蛾存流の奴等が何を考えているのか、一体どんな目的があるのか……まだ分からないがそれだけは絶対に、絶対に何があっても、例えどんな代償を払ったとしても……。

その為なら、暫く会えないくらいどうって事ない！

「父さん……」

そうと決まればやることは1つ。

「なんだ？」

「修行しよう！！！」

考えていてもどうにもならない。俺は俺が今出来ることをするだけだ！

ただ、それだけ。

「……な？しゅ、修行？」

「せっかくの休みなんだからさ一緒に修行……しよ？」

そう、今はひたすら修行をするのみ。

「智樹く、お父さんは、お父さんは……嬉しいぞ！」（泣）

何で一緒に修行するくらいで泣くんだよ！

さっきの真面目な親父を返せ！

まあ親父のこんなところも好きだったりするのだが……。

変な意味では無いぞ！

## 旅立ちの決意！（後書き）

親父に智樹が襲われたことを報告したときの狂喜乱舞を番外編で投稿しようかと思っているのですが……。

親父のことが好きだと言って下さった方もいたので……。

あれ、変な意味にきこえるな？

まだ迷っているの、投稿するかどうかは皆さんに決めてもらいたいです！

ということで、投票お願いします！

×切はそうですね、次の次の話を投稿するまでです！

そのときまでの投票数で決めます！

どうか皆さん御投票お願いします！あと、一言でも、感想や意見などを書いて下さると励みになります！誤字脱字報告も遠慮せず！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5339y/>

---

今日から「お」のつく自営業？

2012年1月8日14時47分発行